

Night of the full moon and they

緋月夜

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

初めまして、緋月夜と申します。

初めて小説を書きましたので、誤字や読みにくいなどあるかもしれませんが、そこは初心者だから、と大目に見てください！<|_|>さて、簡単にこの話についての説明をさせていただきます。

この小説は、二話完結の物語になっております。

原作は東方Project、世界観は東方Projectヴォーカルアレンジ、SOUND HOLIC様のPriereのPVの内容を元に、妄s：想像を膨らませて即興で書いたものになります。

オリジナル要素ガン積みで、PVの内容に添えていない部分もございますが、ご了承ください。

——それでは、どうぞ。

目次

第二幕	6
第一幕	1

第一幕

その日は満月だった、蒼白く輝く、満月…。
私達は、その日、吸血鬼になった。

——雷鳴が轟き、風雨が窓ガラスを叩く夜、彼女は夢を見ていた。
普段の彼女は、夜明けから昼間にかけて眠りにつき、黄昏時に目を
覚まし夜を統べる夜の帝王、吸血鬼。

しかし、今夜はいつもとは違って、夜に睡眠をとっていた。

彼女の名は、レミア・スカーレット。

見た目の幼さに反し、生きてきた時間は五百年。

人間から見れば、それは途方に暮れる様な時間である。

——彼女の住む館、紅魔館で彼女を主とし、メイドとして長年務
めたメイド長、十六夜咲夜が彼女の部屋を訪れる。

不安と胸騒ぎとが、咲夜の胸を渦巻き主の部屋へとその足を向けて
いた。

ノックをし、一声。

「…お嬢さま、夜分に失礼致します、咲夜です」

…返事はない、そのまま扉を開ける。

中は暗く、廊下から差し込む細い光が主の——レミアの首筋から
顔にかけてを照らし出す。

白く透き通った絹のような美しい肌、滑らかな水色の髪、そして細
く整った彼女の顔が照らされた。

長年この主に仕えてきたが、今でもその美しさに見蕩れてしまう。

そして、その寝顔をよく見ると、目元にキラリと光を反射するもの
があった。

——「…涙？」

——これは夢、か。

…いつまで経っても、この事実からは逃れられないのか…。
…こうするしかなかった、後悔なんてない。

寧ろ、こうでもしなければ今頃私は…。

…私達姉妹は…。

私、レミリア・スカーレットは、元は人の子だった。

広い屋敷で、笑顔と愛情に包まれてこの世に生を受けた。

毎日が幸せで、私が5歳になる頃には、妹が生まれて…と、不安も不満も無かった。

しかし、その幸せも長くは続かなかった。

始まりは、実父の病死。

私が12、妹——フランドール・スカーレット——が7歳になる頃に、謎の病によって、帰らぬ人になってしまった。

私も母も妹も、悲しさに打ちひしがれ、屋敷の使用人もメイドたちにも、暗い雰囲気広がっていった。

その頃、私達姉妹の世話役だった咲夜が、毎晩私達姉妹のベッドで、共に眠ってくれた。

それが唯一の慰めであり、救いだった。

それから一年が経ち、私達の後見人として実父の弟——叔父に値する——が、屋敷に訪れた。

最初は、私達姉妹に優しく接し、父のように振る舞ってくれた。

しかし、亡くなった父を想い続け、毎夜毎夜静かに涙を流す母の姿を見た叔父は、沸々と苛立ちを募らせていった。

いつまでも自分を見てくれないと、兄の代わりであると認められないと。

そして、母と同様に私達姉妹も、亡くなった父の事を忘れることなど出来る筈もなく、毎晩涙を流し、咲夜に抱きしめられながら眠りについていったのだ。

そんな姿を見て、叔父はどうとう不満と苛立ちを爆発させた。

まず初めに、私達姉妹を牢獄へ閉じ込め、毎日毎日、暴力を振るった。

咲夜も世話役から外され、ただのメイドへと戻ってしまった。

急な叔父の態度の変貌、暴力と罵倒を受ける日々、変わってしまった日常、亡き父との幸せな時間。

それらを思い出して、私達姉妹は身を寄せ合い泣き続けた。そんな私達姉妹の姿を見て、叔父の暴力は更に苛烈になっていった。

母は、特に何かをされた訳では無かったようだが、かと言って私達を救うというような事はしてくれなかった。

ただ、世話役から外されたはずの咲夜がどういう訳か、毎日私達の囚われた牢獄へと様子を見に来てくれた。

彼女の存在がなければ、とつくの昔に心など折れていただろう。

彼女はよく話をしてくれた、たった一つのおとぎ話を。

それは、全てを失って人間から吸血鬼になった男の話。

——その男は、小さな村で家族と幸せに暮らしていたという。

子供と森を歩いたり、遊んでいる子供たちを見たり、共に食卓を囲んだり、一緒に眠りについたり、と。

そんな幸せな毎日を送っていた男は、ある日「村荒らし」と呼ばれる賊に、家族を殺され、村を焼き払われてしまったという。

たった1人生き残ってしまったその男は、家族を失った悲しみと、自分の無力さを嘆いたという。

——力が欲しい、大切な物を守るだけの力が欲しい……と、彼は願ったそうだ。

そして、力を手に入れる方法を探し、数年かけて探し出した。

それは、——吸血鬼——になることだった。

血で塗られた様な紅い満月の夜に、人の血を盃で飲み干す。

彼は、藁にもすがる思いで、これを実行した。

——それから彼は、夜になる度「村荒らし」を探して旅をした。

道中で人の血を吸い、眷属にした女性と子を作ったそうだ。

その女性を自宅に帰り、彼は復讐のため「村荒らし」を探し続けた。

旅を始めて一年が経とうという頃、とうとう彼は、家族を惨殺し、故郷を焼き払った、憎き「村荒らし」を見つけ出した。

それから早かった、人間を超えた力を持つ吸血鬼に、高々武器を持った程度の数人の人間が敵うはずもなく、「村荒らし」達をねじ伏せた。

彼は、「村荒らし」達に問うた。

—何故人を殺す？何故生活を奪う？何のために？—

息も絶え絶えに、「村荒らし」達は応えた。

—そうするしか、生きる道はなかった—

—強者にならなきゃ、生きてなどいけなかったからだ—と。

その言葉に、彼は驚愕した。

自分のやっていることは、この憎き「村荒らし」と同じだということとを、「村荒らし」達の言葉で漸く気付いたという事実にある。

そして彼は、今までのことを思い出し、後悔し、絶望した。

その彼の手は、いつの間にか「村荒らし」達の血で染まっていたという。

—それから彼は手紙を書いた、自分の子を孕ませた女性宛に。その手紙にはただ一言、—すまなかつた、子供を頼む—と。

手紙を届け終えた後、彼は自分の心臓に杭を刺して自殺したという。

—私はこの話を聞く度に思うことがある、これは、単なるおとぎ話ではないだろう、と。

そうでなければ、同じ話を何度も意味もなしに咲夜が話すはずがない、と。

そして私は、いつしかこの話が実話であると信じ、これを最後の希望にしようと心に決めた。

それは、牢獄に幽閉されてから3年が経った、満月の夜だった。

—牢屋に閉じ込められてから、どれだけ経ったんだろう。

綺麗な真紅を基調としていたはずの私の服とスカートは、ほこりや私自身の血で汚れてしまっていて、元の色が褪せてきていた。

お姉さまの服も、同じ…。

苦しいのも痛いのも嫌い……でも暴力を振るうアイツはもつと嫌

い……！

大切なお姉さままで傷付けるなんて…許せない。

…でも、私達姉妹には今のところ、暴力を振るうアイツを退ける事はおろか、この牢屋から出られる力なんてなかった。

咲夜はいつも、—もう少しの辛抱ですから—としか言ってくれない。

…もう少しっついていつ…？いつになればこの苦しみから開放されるの……？

お姉さま……教えてよ……。

……もう、こんな生活するくらいなら…死んだ方がマシよ…。

——数ヶ月が経ち、木々は葉を落とし、動物達も活動をやめ始める冬の季節が訪れた。

相変わらず牢獄に囚われたままの私達は、冷たいこの石造りの部屋の中で、二人寄り添って唇を震わせていた。

牢獄の天井には、もう家主のいない蜘蛛の巣が揺らめいていた。

気付けば夜になっていた、普段なら静かなはずの夜も、今は雨音で静寂はかき消されていた。

そして、ふと気がついた。

今日はアイツが来ていない、と。

そう思っているうちに、咲夜が来て、アイツの居場所を教えてください。

—あの方なら、昨日の夜中に友人の元へ出かけていきました。2、3日は戻らない、と。—

それを聞いた私達は、少しだけ安堵した。

その日は、牢獄からは出られなかったけど、温かいスープにあり付け、暖かい毛布で眠ることが出来た。

第二幕

——久々の温もりの中で目覚めた翌日の夜、私だけ、お母様に呼び出された。

フランはなぜ呼ばれなかったのだろうか？何故今になって私は牢獄から出されたのだろうか？それ以上に、何故お母様から呼び出されたのだろうか……？

疑問と不安が入り交じり、黙って俯いたまま、呼び出された通りに館の屋上の時計台へと足を向けた。

——屋上へと続く扉を開けると、まず目に飛び込んできたのは蒼白く輝く満月だった。

季節が冬という事もあつて、肌に張り付くような冷気が、辺りを包んでいた。

そして、その奥に佇む1人の女性——お母様。

牢獄に幽閉されてから3年、1度も顔を合わせることもなかった私達姉妹の母親。

そして、お母様はゆっくりこちらを振り返り、口を開いた。

——「弱い私を許して」

そう、涙混じりに語りかけてきた母の顔は、美しさを忘れ、酷くやつれてしまっていた。

私は、問いかける。

「何故助けてくれなかったの？」

そう、聞かざるを得なかった。

私達姉妹は、3年も牢獄に幽閉されていたのに、そんな暴挙を見て見ぬふりをし、私達を見捨てたのか。

そう、畳み掛けたくなるのを抑えて、あくまでも冷静に言葉を紡ぐ。

「私達は、幸せを望んでいただけなのに」

「何故私達は牢獄に入れられたの？」

そう、訪ねた。

そんな私の言葉を聞いていた母は、ゆっくり目を閉じて、語る。

私達姉妹が幽閉された時、2度と私達に近づかないと叔父に誓わされたこと。それを守らなければ、私達及びお前も殺すと脅されていたこと。毎晩夜の相手をさせられたこと。暴力こそ無かったものの、毎日暴言や罵倒は当たり前だったこと。

これらを話し終えて、母は言った。

「それでも、私はあなた達姉妹を見捨てることなんて出来るはずがなかった」と。

「あなた達姉妹の様子を、咲夜に見てもらおうように頼むしかなかったの…私には」

ここまで話し、母は顔を背けた。

顔を背けた瞬間に、月の光を反射するものがあつた。

母は泣いていた、静かに、しかし大粒の涙を流して。

「…なぜ泣くの？」

私は問う、何故そんなにも涙を流すのか。

三年もの間幽閉され、暴力を振るわれ、涙も枯れ果てた私には、母のその涙を、理解することは出来なかつた。

すると、母は涙を流しながらさらに悲しそうな顔をして、言った。

「…3年も、愛するあなた達を見ることすら許されなかつたのよ…いつの間にか、背も伸びて、髪も伸びて…本当なら、こんな形で成長していくのを見たかつた訳じゃないのに…ごめんなさい」

嗚咽混じりにそう言った母の言葉を、理解するのにかかるの時間がかかってしまった。

——そして、理解を終えた直後、私の頬に微かに流れ落ちるものがあった。

「…あれ？なんで…私…泣いて…？」

止まらない、すっかり枯れ果ててしまったと思っていた私の涙は、確かに今。私の頬を流れていた、

その時、ふと私を柔らかな温もりが包んだ。

「…やっと、抱きしめられたわ…レミリア…、やっと貴女に触れられたわ…今までごめんなさい…母親失格ね…私」

ぎゅう…と、優しく包まれるように抱きしめられ、私は更に涙が溢

れた。

3年もの間、この温もりに包まれることはなかった。

私は愛されている、と実感などできなかった。

それでも今、こうして私は抱きしめられている。

……私は、私達は、ずっと愛されていたんだ。

アイツにどれだけ酷いことをされても、お母様は、ずっと私達を愛してしてくれた。

それが分かって、私は涙を止めることなど出来るはずもなくて。

「…ぐす…っ…お…おかあ…さまあ…わたし、私…のこと、ずっと…」

「…ええ、そうよ…私は、あなた達姉妹の事を、ちゃんと愛していたわ…あの人の逆鱗に触れるのを恐れて…直接何も出来なくてごめんなさい…私を許して」

この時、私の中に母を恨む気持ちなんて微塵もなくて、ただ、今こうして愛を確かめ合っている、それだけで地獄のような3年も、救われたと思えた。

「さあ…怯えるのも、もう終わりにしましょう、レミリア」

しつかりとした口調で、母は私に言った。

「咲夜がしてくれたおとぎ話を覚えているかしら？」

もちろん、と答えると、母はさらに続けて、

「あの話に出てくる男性はね、私のお祖父さんなの…って言ったら信じられるかしら？」

と、衝撃の事実を言い放った。

そして、私はその一言で全てを悟った。

「…その顔は、全部理解出来たみたいね」

「…もし話が本当なら、生贄は…？」

私は、恐る恐る母に訪ねた、まさかそんなはずはないと思いつつながら。
しかし――

「生贄は、私…よ」

——「そ……んな……」

最悪の事態が、そのまま現実になってしまった。

母は、私の頭を撫でながら

「……これは、罪滅ぼし……と願う私のわがままよ、自己満足……かしらね」
私は、そんな母の言葉を聞いて、体が震えるのを感じた。

……そんなことをしたら、母は死んでしまう。

そんなのは、私の望む幸せなんかじゃない……!

「そんなことしたら……お母様は……!」

しかし、そこから先は口に出せなかった。

母の、真紅に輝く強い瞳を真正面から見てしまい、そして更に母の心が伝わってきたから。

「私はね……あなた達姉妹が幸せになれるなら、死ぬのは怖くないわ」

——お姉さまが連れ出されて、どれだけ経ったのかな……

何の話をしてるんだろう……私もお母様に会いたい……

そんな事考えていると、何やら足音が聞こえる。

……お姉さまが帰ってきたのか、咲夜が様子を見に来たのかな
しかし、その2人よりも足音が重い。

——「ああ?レミリアが居ねえじゃねえか、おいテメエ!レミリア
はどうした!」

……それは、諸悪の根源——叔父だった

「ひっ……!」

なんで……コイツが!?しばらく出かけるって……!

「何とか言えよオ!このクソガキがよオ!!」

そう言っつて、叔父は私の顔を殴った。

成人男性の拳は、大して鍛えていなくても十分凶器だった。

「痛……ッ……ぐう……!」

私は痛みを堪えるためにうずくまり、顔を抑えた。

「うるせえんだよ、この出来損ないが」

そのままうずくまった私の腹に、容赦なく蹴りを放つ。

「がふ……っ……うえ……!」

腹部に強い衝撃を受け、胃液が逆流していく。

「おえ…うう…げほっ…」

床に血と胃液とが混ざったものが撒き散らされ、それが叔父のズボンにかかってしまった。

それを見た叔父は――

「汚え…テメエ、何勝手に吐いて汚してんだよ！」

と、私の頭を踏みつけ、床にこすり付けた。

「あああああ!!」

靴のまま踏みつけられたので、顔に激痛が走る。

「うるせえって、言ってる、だろう、がッ！」

そんな私の顔を何度も踏みつけ、最後には再度腹部を蹴った。

「がふ…っ…げほっげほっ…ぐ…うう…」

どうやら、お姉さまが牢屋から抜けたことに対して、相当怒り狂っているらしい、今までの比じゃないほどの暴行だった。

「今まで生かしてやってきたが、もう許さねえ、テメエら全員ぶっ殺してやる」

と、そのまま私の首を掴み、壁に押さえ付けた。

「かはっ…!?ぐうう…!」

首を絞められ息が出来ず、意識がだんだんと遠くなっていく様な気がした。

「どうだ!?苦しいかア!?ハッハア!そのまま死ねエ！」

ギリギリ、と首を絞める力が強くなっていく。

「ぐっ…い…けほ…か…っ…」

全身から力が抜け、叔父の手を掴んでいた両手の内左手が外れる。

その時――「まだ生きてんのか…早く死ねよ、出来損ないのお前の姉もこれから始末するんだからよ」

――出来損ない…?…お姉さまが、出来損ない…?

…お姉さまを…お姉さまを愚弄するな…!!

―その時、ドクン、と私の心臓が高鳴る。

そして、私の右手の中に、何かが現れた感覚があった、わけも分からずにそれを握りつぶした。

そうすると私は、叔父の手を掴んでいる右手でそのまま――

――ベキイツ!!

――叔父の手を、へし折っていた。

「ぐおああああああ!!?」

叔父が痛みで私の首から手を離し、私は解放され床にズルりと落ちた。

「げほっげほっ……!はあっ……はあっ……はあ……」

やっと解放され、深く息を吸いこんで、呼吸を落ち着ける。

「テメエ……!よくも俺の腕を……!!?」

そして、叔父はそこで気がついた。

自分の右手が、手首から先が存在していないということに。

「俺のっ……!俺の手がアアア?!?」

右手を抑え、床をのたうち回る叔父の姿は、酷く滑稽に思えた。

「はあ……はあ……ふう……、意外と、脆いのね、アンタ」

そう吐き捨て、右手に持った叔父の手を投げ返す。

「テメエ……!調子に……乗りやがって……!」

やはり右腕をおさえながら、こちらを睨んでくる叔父は、最早恐怖の対象では無くなっていった。

自分でも、未だに理解出来なかった。

今の自分にこんな力があつたなんて。

……まるデ、おとぎ話ノ吸血鬼みたいイ。

……吸血鬼?ああ、そうね……

……今夜は満月、血を流した人間、酷く傷付いた私の体……

……やることは一つしかない、わね。

「アンタが存在していることは、私の望む幸せな日常には不要なの」

……だから、アンタの狂気ごと、私が抑え込んで吸血鬼になる。

……私に還りなさい、文字通りに、ね。

「や……やめろ!何する気だ!?!ぐああああああ!!痛い痛い痛い!!

やめろ！やめてくれエ!!しにたく、じにだぐない…！ダズゲ…！！」

——「…不味いわ、アンタの全てが」

そして、私の背中から七色の宝石を下げた翼が生えてきた所で、意識は途切れた。

——私は、未だに決めかねていた。

母を屠り、贅とし、自分が吸血鬼となって力を手に入れることを。躊躇う理由などいくらでもある、母を殺して、永遠を手に入れたくなんかない、幽閉される前のように温かい家庭で過ごしていたかった。

でも、それはもう叶わないと知った、だから力を手に入れるしかなくなってしまった。

ふと、母から何かを手渡された。

——それは、白銀に輝くナイフだった。

「それで私を刺して…そして私の血を飲んで、そうすれば、あなたは永遠を知る吸血鬼となる」

母は、ハッキリとした口調で、これ以外に方法はないと伝えてくる。

——私は震える手でナイフを構え、母に向けた。

涙すら流していたと思う、それでも、こうするしか無かった。

「あ…あああああつ!!」

私はそのまま、母の体に刃を突き立てた。

「ぐうう…！がはっ…!!」

母の口から鮮血が吹き出し、私の服や顔、両手を真紅に染めていく。そして私は、流れる母の血を飲んだ。

口の中に広がる鉄の味、吐き出しそうになるのを必死に抑え、飲み込む。

——その時、とくん、と、胸が鼓動する。

その瞬間、体に力が漲り、背中からは蝙蝠の羽のような翼が生えてきた。

自分の変化を見届け、母の方を振り返る

「…なれた、のね…私と…同じ吸血…鬼に…」

口と傷口から絶え間なく血が流れ、命の灯火が消えかかっているのがはつきりと感じ取れた。

「お……かあさま……私は……私は……!」

私は涙を流しながら、母を抱きしめる。

すると、母はこう言った。

「あなたには……私の母と……祖母が……繋いで、育んできた……特別な力を与える……わ」

息も絶え絶えに、母は続ける。

「運命を……操る力を……貴女に……託すわ」

運命を操る力……?

「それって……!?!」

力について聞こうとした瞬間に、母の体から力が抜けて行くのが感じられた。

「お母様……?お母様!?!しっかりして!お母様!!」

必死に体を揺すり、必死に母を呼び止めようとする、しかし

「……あなた達は、必ず……幸せになって……それが、私の最後のお願い……お別れじゃないわ……母さんは、あなたの中で……永遠になる……から」

そして、微かに言葉を紡ぐ。

「……あり……がとう……ね」

そして、そのまま母は眠るように逝った。

——「お母様ああああ……!!」

——それからの事は、よく覚えていない。

館の中に戻り、暴走する吸血鬼の力を抑えきれず、屋敷内の妖精メイド達を皆殺しにしていた。

そして、ふと我に帰ってあたりを見回すと、館の中が鮮血で何処も彼処も染まっていた。

……私は絶望し、意味もなくその足を進めようとする、と、その時、

——カツン…

と、小さな音がした、

足元を見ると、血がべつとりと付いた懐中時計が落ちていた。

ハツとなつて、辺りを見回すと、血だらけの咲夜が壁にもたれて倒れていた。

「……さ、くや……？」

呼びかけるも、返事はない。

「そんな……いやよ……咲夜……目を開けてよ……咲夜……！」

咲夜の側で、彼女の名前を呼び続ける、すると、

「……おじよ……うさま……私は……貴女さまの傍に……いられて……幸せでした……どうか……おじようさまの……お心の……ままに……」

と、笑顔で私に伝え、この世を去ってしまった

冷たくなっていく彼女を抱きしめ、ありがとうと、伝えることしか出来なかった。

力を手に入れても……独りになるなら死んでしまいたい。

そんなことをぼんやりと頭に浮かべながら、牢獄へと戻ってきた。

そこには——

——七色の宝石を下げた翼を生やしたフランが、こちらに背を向けて立っていた。

「……フラン……？」

と、私が声をかけると、彼女は振り返り、一言。

「……寒い」

「……っ！」

私はそれを聞いて、フランを抱きしめることしか出来なかった。

そして、私達姉妹は、全てと引換に吸血鬼になった。

——「ん……あ」

……やはり、夢か。

……でも、私もフランも吸血鬼になって、皆居なくなっていました。

私は、あの時から、闇に幸福と平和な日常を願い、月には母の安寧と冥福を祈り続けている。

……それこそが、全てを壊してしまった私の罪滅ぼしなのだ、自身を戒めるために。

「…お嬢さま？」

と、私はその一声で我に返った。

「あれ…咲夜？」

ここは、私の寝室のはず、何で咲夜が？と疑問を抱いていると、咲夜は不安そうな顔で

「実は…お嬢さまの事が頭を過ぎってしまい、寝室にご様子を伺いに来たのですが…お嬢さまがお眠りになりながら涙を流していらっしやったので…」と、話してくれた。

私は、心配されている事がこれだけ嬉しいのかと、認識した、

「紅茶、お飲みになりますか？少し落ち着かれた方が…」

と、咲夜が気を使ってくれたので、お言葉に甘えることにした。

彼女が淹れる紅茶を飲むと、心がじんわりと暖かくなる。

ふと一息ついて、窓の外の景色を見してみる

するとそこには――

「綺麗ですね…」

「ええ、本当に……」

——そこには、母の最期を看取った日に出ていたのと同じく、蒼白く輝く満月があった。